

第三段階

切り分けを加えた体の複合的な変化

2-1 体を切り分ける

支点の解除というのは、基本的には支点の中心に対して行う一点圧です。しごく単純な手技ですが、“支点の中心”に対して全身の力を一点に収束することで通常の押圧とは異なる体の反応を引き出し、本来なら消し去ることの難しい支点を“解除”するわけです。これだけの手技でも扱いに慣れれば相応に幅広い施術が可能となるので、先の連動の回復も大体はこの手技で行うことができます。しかし体から支点を順次解除していくと、次第に支点はただの”点”ではなくことが多くなります。体組織に生じた圧着や軽度の癒着などは“面”としての性質が強いため、一点圧だけでは対応がしにくくなるのです。これに対して行うのが“側”という施術で、面となっている支点を“切り分ける”ことで消し去っていきます。

この場合の手技＝“手指の扱い”は、手指による刺激をこれまでの“点”ではなく、“線”とします。手指のあらゆる側面を用い、そこから生じる力をナイフのように鋭い線状へと変換させることで、体のあらゆる“隙間”に手指による刺激を加えていきます。この手技の使い道は多岐にわたるのですが、基本の段階での用途は主に「筋肉間もしくは筋繊維の隙間」「関節の隙間」「内臓（各臓器）の隙間」などとなります。これらを切り分けることで、隣り合う組織同士の機能を本来の互いが独立して機能できる状態へと戻すことができます。

これを応用すると、複数の骨が過度の緊張によって強固に結びついているような場合でも、各関節に“正常な隙間”を回復させることで、各骨に本来の自由な動きを回復させることができます。これは「関節の離開（組織の離開）」と呼びます。多くの場合、骨＝関節の動きは、そこに明確な動きの異常が見られない限りは「ほぼ正常」と扱われるものです。しかし実際に

は足根骨や手根骨がそうであるように、多くの関節では隣り合う骨との間で互いが強く干渉しあう「固着には至らない過剰な粘性の高まり」といった動きの低下が生じているものです。例えば足関節なら、本来は個々の骨が本来の自由な動きを有した上で、互いに協調しながら動くことが理想なわけですが、関節をまたぐ二つの骨が互いに強く干渉する状態にあると、その関節の動きにも大きな制限が生じてしまうことになります。こうした「ある関節の機能制限」は、必ず全身の関節によって代償されるので、その問題は全身の関節に及ぶことになります。

この切り分け（側という手技）は全身のあらゆる組織や部位に用いることができます。その前提となっているのは「体はそのすべてが繊維構造である」という考えで、繊維構造である限りはどこにでも“隙間”があるわけです。そしてこの隙間とは、体を構成するすべての組織や器官が互いに独立した自由度を保つための重要な役割を有しているものです。こうした隙間を扱う手技（感覚）を有することは、通常の手技では対応できない多くの問題を解決するのに有効であり、これを応用することで非常に幅の広い施術が可能になっていきます。

2-2 内臓の隙間と体の動き

ここまでの施術は、その対象を「運動器」中心としてきました。しかし、体を「運動器（体壁系）」と「内臓（系）」とに分けて考えた場合、機能的な重要性は「体壁系<内臓系」となります。こうした視点からすれば、私たちが日頃目にする「運動器の機能異常（愁訴）」というのは、その原因が内臓の機能異常にあると考えることができます。そもそも運動器の役割は「動き」よりも「内臓の保護」が優先です。内臓に何らかの問題が生じれば、運動器はそれを“守る（庇う）”“ために、その機能を制限せざるを得ないわけで、それが結果的に「運動器の機能異常＝愁訴」であるという考え方です。ただし、内臓への施術というのは「内臓の生理機能」と「内臓自体の物理的な動き」の二種類があります。前者を扱うには相応の感覚や経験が必要なので、ここでは扱うのは後者に限ります。

実際に、ある関節に機能異常が生じているとして、その関節に関わる近隣の内臓（特定の臓器）には、必ず何らかの機能異常が見られるものです。実際にそうした内臓側の問題を解消すると、運動器側の機能異常が劇的に改善されることは少なくありません。ここではそうした内臓の機能異常を「臓器間を切り分ける」ことで改善していきます。内臓の各臓器というのは本来、隣り合う臓器や周囲組織との間に必ず“隙間”があり、その隙間を流れる漿液の循環によって、互いの独立した動きが保たれているものです。しかし何らかの理由からこの漿液の循環が滞り、隣り合う組織間で互いが干渉しあうようになると、本来の自由な動きを失った臓器ではその生理機能が大きく低下します（その結果として関連する運動器の動きにも大きな制限が生じる）。これを「切り分ける」ことで正常な隙間と漿液の循環を回復させていくのです。

実際にこうした施術による運動器への影響（効果）は、ほとんどの場合において、運動器への直接的な施術よりずっと大きな効果となり、その多くは運動器への直接の施術からは得られない種類の変化です。この施術に慣れた時期では、これまでの施術では改善ができない運動器の問題を、内臓の動きの改善から解消することができるはずですが、それほど内臓からの運動器への影響というのは大きく、両者が「内臓系>体壁系」という関係性のもと、密接に関わっているのです。もちろん、内臓の動きからだけで、運動器の問題全てを解決できるわけではないのですが、早い時期に「内臓による運動器への影響」を経験的に理解しておくことは以後の施術に重要な意味を持ちます。

内臓の各臓器を切り分け、本来の自由な動きを回復させるということは、結果的に対象臓器の代謝の回復に繋がるため、結果的に生理機能の向上にも繋がります。ただしこれは、対象臓器の生理機能の低下が、周囲組織との干渉という“外因”であった場合にみに有効であり、それとは関係なしに対象臓器の内部で問題が生じている“内因”であった場合には、生理機能の回復は望めません。内臓の生理機能を扱うためには、それを扱うに適した“手”が必要であり、その手を持たない者が内臓に触れば、それだけで内臓の生理機能を大きく損なってしまうこととなります。それゆえ、この段階で扱うべきは「内臓そのもの」ではなく、あくまで「その隙間」に限られるのです。

2-3 体を分解する

切り分けるという施術は、丁寧に行えば周囲組織から干渉を受け、本来の自由な動きを失っている組織なり器官なりに、本来の動きを取り戻させることとなります。例えば足根骨の舟状骨などは、周囲の骨から靭帯・筋肉などの干渉を強く受け、単独の自由な動きなどほぼ存在しないようなものです。しかし、舟状骨に関節する他の足根骨を、それぞれ切り分けることによって明確に分離させることができれば、そこで舟状骨は周囲の足根骨から影響を受けつつも、一定の範囲で独自の動きを確保できるようになります。「周囲からの影響>舟状骨独自の動き」から「周囲からの影響<舟状骨独自の動き」へと動きの優先順位が変化するわけですね。

これは単に関節を切り分けることで成立するのではなく、その切り分けられた状態を、靭帯や筋肉が受け入れるよう反応することで、骨それぞれの自由な動きが維持・確保されることで成立します。つまり、そうした変化を脳が受け入れ、然るべき神経反応が起こることで、特定の骨の自由な動きが成立するわけですね。この方法を用いると、「足部」を構成する骨の全てに、こうした独自の自由な動きを回復させることも可能となります。こうした施術は感覚的には「機械を分解する」と似ており、骨という単位で体を「分解する」作業となります。

こうした作業は、周囲からの影響を受けて不自然な動きを強いられている特定の骨に対して、その動きをリセットすることとなります。仮に、あるひとつの骨だけの動きがリセットされたとすると、その骨だけは体本来の自然な動きを有し、その骨以外の全身は既存のバランスを保つという不安定な状態となり、体はそこでひとつの選択を強いられることとなります。それは「既存のバランスに合わせてその骨を再度固めるか」

または「その骨の動きに合わせて全身を変化させるか」です。もちろんほとんどの場合は、体は前者をします。しかし、その自然な動きを行う骨が2個、3個と増えていけば、その動きを抑え込むことは難しくなるので、あとはどれだけの骨が自然な状態となれば、体が後者を選択するか、となるわけですね。

これは非常に手間のかかる施術ですが、周囲の干渉から解放されて独自の動きを優先させることができるようになった骨というのは、簡単には元に戻りません。また、その数が増えれば、体はそれらの動きを再度抑制するために、体自身の機能に大きな変化を強いられます。つまり、ひとつの骨が独自の動きを有することで全身の関節に起こっている強固な“結束”がわずかに緩めば、次の骨に独自の動きを回復させることが少し容易になり、その数が増えるほど施術が容易になるわけですね。

そうして、結果的に全身の関節に同様の変化を引き起こすことができれば、全身の機能そのものが著しく変化することになります。こうした作業は感覚的に「車のオーバーホール」と似ており、全身の骨の機能をいったんバラバラにすることで、体自身に再構築を行わせます。この施術の意義は、体の機能を正すことは当然として、同時に関節という関節、骨という骨の扱いに慣れ、その結果として生じるさまざまな反応から、全身の骨同士が相関関係を以って機能しているのかを体感することにあります。全身全ての関節と骨の扱いに慣れることが、先々の施術に大きな意味を持つのです。

2-4 体を末端から変化させる

ここまでの施術は、“点”の支点の解除にせよ、“面”の切り分けにせよ、全身のスムーズな機能の障害となっている「大まかな支点」を消し去ることで、全身の機能バランスを変化させていくことを目的とした施術です。しかし体には、ある部位全体が支点といえるほどの極度の緊張が生じている場合があります。そうした特殊な緊張が成立するのは「関節が狭い範囲に密集している部位」であり、これは脊椎や足部・手部などです（小さな骨が多く存在する部位）。

体に一定以上の緊張が生じ、それが歪み・捻じれとなって“安定”するためには、必ず安定するための仕組みが必要です。体の歪みや捻じれを単純な理屈で整理すると、歪みや捻じれとは「体の中心である脊椎に始まり末端の四肢（頭部）で終わる」となります。これは脊椎では小さな歪みや捻じれが、末端へ向かうに従い大きくなる、と言い換えることもできます。実際には、手足のケガから脊椎が歪むこともあれば、内臓の問題から脊椎が歪み、それが末端で大きくなっているなど、その仕組みは様々なわけですが、どういう経緯で生じた歪みや捻じれであれ、その状態を維持するためには、末端側にそれを固定する仕組みが存在します。これはよくビニールに包まれた「アメ玉」で説明するのですが、アメ玉がビニールの両端をしっかり捻じることによってその安定を保つのと同じで、体の歪みや捻じれは必ずその末端に強い“捻じれ”が固定されることで安定状態を保っています。

これを前提とすれば、ここで「末端の捻じれをほどく」という施術が成立することになります。体の歪みや捻じれは、手部や足部（頭部）といった細かな骨が集中している部位でより複雑化し、その中で極度に強い緊張状態を保てるようになっています。体に強い歪みや捻じれがある場合は、それを補完している末端の

捻じれを解消しない限り、全身の歪みや捻じれ、それに伴う諸々の体の機能不全を解消できないことが多々あるわけです。そこで先の「体の切り分け」が役立つこととなります。末端に生じている細かな骨による複合的な捻じれ、これを分解することで解消することができれば、複雑な体の歪みや捻じれであっても、その扱いが容易になります。

体の末端がほどけるということは、それに伴った歪みや捻じれが解消されるだけではなく、その捻じれによって制限されていた体の諸機能が解放されるということです。これによる体の反応は内臓機能で顕著となり、下肢の捻じれの解放は主に腹部臓器の解放に、上肢の捻じれの解放は主に胸部臓器の解放に、そして頭部の捻じれの解放は全ての臓器の解放に繋がります。体の歪みや捻じれを支えている筋肉の緊張＝力は“歪力”という言葉に置き換えることができます。現状の体の機能というのは「全身の緊張度」によって保たれているので、私たちが施術によって体に変化を与えても、それは緊張の形が変化するだけで、その総量自体はあまり変化しないものです。これは“歪力”も同じで、どこかの歪みを消せば、他がその分だけ歪むことで全体の歪力は補完されるものです。

しかし、そうした歪力を体に固定するための末端の捻じれを消し去ることは、その歪力そのものを低下させることに繋がります。体自身が一定の歪みや捻じれを保つための仕組みそのものを変化させることで、「歪力の低下に伴う体の諸機能の解放」という、通常の施術では得にくい効果を得ることができるわけです。

2-5 体を中心から変化させる

先の末端とは逆の話になりますが、体の歪みや捻じれの程度には必ず上限があります。その上限とは「脊椎の強度」であり、体の歪みや捻じれは、脊椎がそれを支えることのできる範囲内でしか生じることができません。大きな歪みや捻じれの背景には、必ずそれに応じただけの脊椎の強度が成立しているということです。これは裏を返せば、脊椎の（不要な）強度を下げることであれば、それに応じて全身に生じている歪みや捻じれも減弱する、ということになります。その方法は脊椎の局部に対して「切り分け（分解）」を行うということです。

仮に脊椎を強い強度を持つ“弓”だとすれば、そのどこかに“ひび”が入れば、弓の強度は極端に低下します。脊椎はその全体が一定以上に緊張することでその強度を保つものですが、切り分けによって特定の椎骨「部分的な機能の正常化」を回復させると、これが先の“ひび”に相当し、脊椎は「全体での強い張力」を維持することができなくなります。脊椎全体に生じる強い緊張（強度）というのは、緊張によって個々の椎骨の動きを一定に制限することで成立しています。その中にひとつを、そうした制限から解放し、独自の安定した動きを保てるようにすることは、結果的に脊椎の中に“強度の低い椎骨”を生み出すこととなります。こうなると、脊椎は強度の低い椎骨に合わせて全体の張力を変化させるしかないので、脊椎全体の強度は大幅に低下することになります。そして、脊椎全体の強度が低下すれば、体はそれまでの強い強度によって支えていた体の歪みや捻じれを維持することができなくなるので、結果的に歪みや捻じれも大幅に減弱することになります。

脊椎は体の全ての機能に関わる緊張を支える“屋台骨”であり、当然それは強く安定しているに越したこ

とはありません。しかし、脊椎の動きとは単純な椎骨の共同運動ではなく、個々の椎骨が独自の動きを有した上で互いが協力する協調運動であることが理想です。つまり、椎骨個々が独立した自由な動きを有した上で、それを大きく損なわない範囲内で協調することで、各脊椎にまつわる諸機能を損なうことなく、強い強度を保つことが理想となるわけです。

こうした脊椎の動きの良否に強く影響を受けるのは内臓の働きで、内臓の各臓器脳の動き、生理機能は、それを支える椎骨の可動性に大きく影響を受けます。つまり脊椎全体に強い緊張が生じ、各椎骨の動きが制限されると、それに比例して各臓器、ひいては内臓全体の動きと生理機能が著しく抑制されることになるのです。こうして内臓の機能を抑制されると、内臓の保護を第一として機能する運動器は、内臓を守るために常に一定の緊張状態を強いられることになり、これが体の運動機能自体を大きく低下させる要因となります。

加えて言えば、脊椎の動きの良否はそのまま脊髄神経に関わる一切の活動に大きく影響し、それは脳の活動にも大きな影響を及ぼします。脳はそもそも脊髄神経の一部が膨隆し、形を変えたものなので、その働きを脊髄神経と分けて考えることはできません。脳にとって脊髄神経とは母体であり、脊髄神経の活動状態は脳に強く反映されることとなります。つまり脊椎の状態は、そのまま中枢神経全体の活動に大きな影響を及ぼすということです。

先の「体の末端への施術」と、この「体の中心への施術」。両者はその効果を互いに補完するものとなるので、両者をうまく組み合わせることで通常の施術からでは得られない多くの変化を引き起こすことが可能となります。

2-6 施術による体の再構築

これまで説明した方法で体の再構成を繰り返していけば、体の機能は次第に大きく変化していくわけですが、実際の体の変化には限りがあります。それは機能的な限界や体力的な限界などとは別の、体が現状の機能を維持しようとする「恒常性」のためです。しかし、現状の恒常性における機能、その範囲内では改善できないところに愁訴や疾病の原因がある場合は（愁訴や疾病の根が深い場合は）、現在の恒常性を崩し、より高い機能を備えた“新たな恒常性”を構築させる必要が生じます。これは一般的に“体質改善”と言われるものと同義で、これを施術によって意図的に行うわけです。この既存の恒常性を壊す作業も「支点を消し去ること」で可能なのですが、その対象となるのは先の「体の機能的な中心」ではなく、そのヒトの心身のあり方そのものを司る、いわば「核」と呼ぶべき特別な支点です。これを消し去るためには、事前にその核となる支点が消えても身体機能に大きな問題が生じないだけの“準備”が必要となります。

施術における体の変化というのは、その施術が現状の恒常性を壊さない範囲である限りにおいて、正常な反応が得られるものです。しかし、その施術が現在の恒常性を破綻させる種類のものであれば、そこには強い抵抗反応が生じます。また、仮に恒常性を崩す「核となる支点」を消し去ることができても、その結果として体と脳の機能は非常に不安定となれば、体に深刻な機能異常が生じやすくなります。そうしたリスクを回避するためには、事前に「核となる支点」が消え去っても対応できるだけの「体と脳の機能的余裕」を用意しておく必要があります。

私たちは施術で「体をよりよい状態へ」と考えるものですが、それは言い換えれば「体に新しい変化を与え続ける」ということです。体にとって新しい機能や

バランスを受け入れる（それに慣れる）というのは、大変な作業です。これを毎回の施術で行うということは、体に大きな負担となりがちです。これについて私は「階段」を例に説明をするのですが、階段には必ず「踊り場」があります。階段を上るように体を変化させ続けたら、どこかでそうした変化を体に定着させるための「やすみ（踊り場）」が必要です。このやすみとは、施術をしないという意味ではなく、新しい変化をさけ、これまでに行った変化の中身を充実させるということです。こうして時折、体の変化を定着させ、かつ体力を蓄えるだけの時期を設けることで、体には今後に起こり得る大きな変化にも対応出来るだけの余力が生まれます。

先の「核となる支点」というのは、こうした体に余力のある状態であればこそ、表面に現れ、施術の対象となるものです。時折、踊り場に相当する「身体機能を充実させる時期」を設けることで、それまで体に隠されていたものが表面に現れるわけです。そして、これを解除することが、既存の恒常性そのものをいったん崩すことに繋がります。当然、慣れ親しんだ恒常性が破綻した体は、一時的に不安定な状態に陥りますが、それも「新しい恒常性」がより高い機能を発揮するための過程であるといえます。恒常性というのは「現状の機能を前提として成り立つバランス」であり、施術を通じて身体各部の機能が高まり、かつ全身の機能が向上していれば、その機能に見合った新しい恒常性が構築されるべきです。そのために、既存の恒常性を崩すという作業が必要となるわけです。これを先の「体の再構成」に対して「体の再構築」と呼びます。そしてこれに必要なのは、身体機能を充実させるための「踊り場の時間」、つまり「待つ」という感覚から成立する施術です。

2-7 重心バランスの切り替わり

体は強い緊張状態にある時、肩に力が入るなど、上半身にその機能的中心があるため、体の重心も高い位置にあります。これが支点の解除によって全身の緊張度が減弱すると、徐々に重心も下がっていきます。これに先の「体の再構築」が加わると、その重心は大幅に下がることになり、その繰り返しのよって重心が一定以上に下がると、ある段階で体が立位でバランスをとるための仕組みそのものが変化することになります。

体が倒れないようにバランスをとる作業は、本来そのほとんどが足部と下腿のみで行われるべきものです。これは立位で膝を大きく曲げて貰えば分かりますが、膝を徐々に曲げていくと、その角度に比例して地面に対する足裏の密着が強くなっていきます。そしてその密着が最大になった時、体の重心は著しく低くなっているはずですが、この時、足部と下腿にはバランスをとるための大きな負担がかかりますが、膝より上の全身では緊張がほどけて弛緩します（個人差はあると思います）。これは足裏が地面と密着することで、足部から下腿に備わった体のバランスを無意識に反射運動によって調整する仕組みが活性化した結果です。

次にそこから膝を伸ばしていくと、次第に腰部や肩部に力が入り、膝がまっすぐに伸びる頃には重心がだいぶ高くなっているはずですが、体の緊張というのは上半身を主体に起こりやすいので、緊張が強まれば強まるほど、体の重心は高くなります。そして大抵のヒトでは、体のバランスをとる作業が膝関節より上で行われるため、腰部や肩部に強い緊張が生じることになります。

こうした重心の高い体に対して、支点の解除を通じて体の再構築を繰り返し行っていくと、ある段階から体がバランスをとる作業が膝から下の足部・下腿主体

で行われることになります。この時点で、それまで膝から上でバランスをとるために全身に強い緊張を必要としていた体が、その緊張を必要としなくなることで著しく弛緩した状態となるわけです。その結果として、それまで強い緊張によって機能を制限されていた内臓などの生理機能は著しく活性化し、身体機能そのものが大きく向上することになります。

この重心バランスの切り替わりは、これまで行ってきた支点の解除により体の再構成、その積み重ねによる体の再構築が正しく行われた結果であり、施術で目指すべき最初の明確な到達点といえます（ただし一時的な変化であり、これが安定に至るのは先の段階です）。体のバランスをとる機能が足部と下腿部に集約されれば、それ以外の全身の機能が解放されることとなり、日常動作における体の負担を大幅に軽減することになります。また、重心が一定以上に下がることによって得られる“体の安定”は、脳の機能の安定や精神的な安定にも大きな影響を及ぼし、結果的に体の回復力や免疫力を著しく高めることにも繋がります。

加えて、体のバランスをとる作業が膝より上で行われている限りは、体はそこに一定以上の緊張を必要とするため、どんな施術を行ってもそうした緊張を消し去ることはできませんし、そうした緊張から生じている機能異常を改善することもできない状態でした。そうした施術における制約から解放されることで、これ以後はより多くの機能異常を施術により改善することが可能となります。

2-8 体の「第一の構造変化」

体に先の「重心バランスの切り替わり」が起こると、強い緊張によってそれまで不安定だった体の機能は次第に安定を取り戻してきます。これまでの施術における反応とは、ヒトによって十人十色の反応であることが多かったわけですが、ここから先にはそうした反応・変化に明確な規則性が現れやすくなってきます。身体構造は誰しも共通です。最初は体の変化に各人の“個体差”が強く反映されていても、その機能が本来の構造に沿って正されていくと、そこで起こる反応は誰しも似通ってくるわけです。そうした中で現れやすいのは脳が体を分割管理する際の「体の区分」です。

これは「脳による体の管理」という見方から捉えた方が説明しやすいのですが、体（脳）は全身の全てを一括管理しているわけではありません。そこには多くの区分があるものです。例えば内臓系と体壁系の組織は脳の中で明確に区分され、その上で機能的優位性は内臓系の側にあります。また同じ体壁系でも、体幹と体肢では明確に区分され、機能的優位性は体幹の側にあります。こうした“区分”が重要な意味を持つのは、その各部ごとで機能を独立させた上で統合するという「階層的な情報処理」にあります。これは、例えば学校が全生徒を各学年、各教室と区分することで、安定した秩序を得られることと同じです。こうした区分がなければ、体に起こったひとつの問題が、容易に全身に影響してしまうわけです。

とはいえ、不調を抱えた体というのは、こうした体の分割管理が曖昧になり、局所の問題が全身に影響するだけでなく、本来は区分されるべき機能が混同することで、全身の機能そのものが複雑化しています。当然、そうした体を管理する脳にとっても、非常に負担が大きな状態です。そうした体に対してこれまで説明した施術を進めていくと、それまで機能が混同してい

た体の中に、明確な分離（機能の分割）が現れてくることとなります。中でも表面化しやすいのは全身の機能が二分される反応で、これは「上下の区分」「左右の区分」「内外の区分」の順で現れます。これを「第一の構造変化」としておきます。

先の「重心バランスの切り替わり」が起こると、体は次第に下半身に独自の安定状態を保とうとします。ここで下半身と上半身の機能が明確に分離される「上下の区分」が起こることとなります。下半身の安定を土台に、次第に上半身の機能も安定すると、そこで下半身と上半身が明確に区分された状態での“統合”が起こることとなります。この安定状態が続くと、次に現れるのは全身の機能が左右に区分される「左右の区分」で、ここでは左半身が安定状態となり、これに右半身の機能までが安定することで統合が起こります。次に起こる「内外の区分」は内臓と、内臓を除く四肢・頭部の両者の機能が明確に分離している状態です。まず内臓側が安定状態となり、これに四肢・頭部の機能が安定することで統合が起こります。

こうした反応は「上下の区分」で統合が起こり、次の「左右の区分」へ移行しても、上下の区分は潜在的に機能しています。つまり、これら全ての反応を終えた時は、見た目にもそうした区分が明確でなくとも、潜在的には全身の機能が「上下・左右・内外」で明確に区分され、それぞれの機能が独立していることになるわけです。この一連の反応は、体が自身の機能をどう整えようとしているかの明確な指標となるので、施術はその後押しをするだけでよいこととなります。同じヒトに長く施術を続けていると、体が正しく先へ進んでいるかが曖昧になりがちですが、こうした反応を指標にすることで施術を正しく先へと進めることができます。

2-9 層という概念

先の「体の再構築」という体の変化は、施術の対象がそれまで扱っていた体の機能から、一段階深いより重要な機能へと移行したということです。これを“層”という言葉で表現するなら、「体をより深い層で扱うことができるようになった」ということです。

ヒトの体というのは多くの層が積み重なる階層構造で成立しています。体の機能には直接生命維持に関わる重要な機能から、私たちが体の表面で扱う「生命活動には直結しない機能」まで、その間に幾つもの機能の「層」があります。例えば熟達した施術者が、他のヒトでは触れ得ない「何か」を扱うことで、体に劇的な変化を引き起こすことができるのは、より重要な機能に関わる「深部の層」を扱うことによります。

ここでの「層」とは、体が自身の恒常性を維持するための防御システムです。重要な機能をつかさどる「層」ほど、体の奥深くに巧妙に隠され、外部からは干渉できないようになっていきます。体はそうやって幾重にも防御の層を持つことで、外部の刺激から自身の機能を守っているわけです。仮に、私たちが施術で“深い層”を扱うことが可能だとしても、それは「体に対して危険を冒す」と同義であり、本来なら「できる・できない」以前に、行うべきことではありません。しかし改善すべき愁訴や疾病、その根がより深い層（の機能）に起因している場合は、その層を扱えない限り改善を望むこともできないわけです（それが本当に「治してよいものか否か」の議論はさておき）。

そうした層を扱うための方法は、「熟達することで扱えるようになるのを待つ」もしくは「表面の層を取り去ることで深部の層を表面化させる」のいずれかしかないわけで、大和整體では後者の方法で深部の層を扱うこととなります。この「層の変化」に相当するの

が「体の再構築」であり、「第一の構造変化」となるわけです（「体の再構成」は層の変化とはなりません）。

体はより深い層を扱えるほど、重要な機能に干渉することが可能なので、深い層を扱うことで本来は治し得ない重篤な愁訴や疾病を改善することも可能となります。しかし、体を層という概念で扱う上で本当に重要なことは「いかに深い層（体の重要な機能）を扱うか」ではなく、「いかに複雑化した層構造を整理していくか」にあります。先に、体の層とは階層構造であると書きましたが、実際には体に不調を抱えているヒトほど、本来は不要である多くの層を抱え、体の構造を複雑化しているものです。そして浅い部分の層というのは、その多くが本来は「不要な層」となっているものです。体は本来、その構造に沿って単純に機能していることが理想なのですが、これが個人の中で複雑化してしまうと、それぞれの層の間で本来円滑に行われるべき連携が正しく機能しなくなってしまいます。

幼い子供はそれほど多くの「層」を持ってはいません。多くのヒトは、成長過程でそこにより多くの層を作り出し（そうすることで身を守り）、結果的に自身の体の機能をより複雑にしてしまっているものです。多くの不要な層というのは、もともとはひとつであった層がいくつかに分かれたものです。そこで不要な層を消し去るという作業は、結果的に複数の層をもとのひとつに戻すということになります。不要な層は消し去り、統合させ、残った重要な層それぞれが円滑に連携することこそが、層という概念で体を扱う際の目的となるわけです。「より深い層を扱って体に劇的な変化を引き起こそう」ではなく、バラバラに機能している層をまとめることで、体の機能をより統合しやすい状態へと移行させていくのです。

1-18 第一章のまとめ

この章で扱った内容は、序文で書いた施術の第一段階、つまり「凍った体を動かす」ことを目的としています。ヒトに限らず、生物の体というのは生きています。限り体は変化を続けるものです。その過程で何かしらの痛みが生じたとしても、体が正しく変化を続ける限りは、そうした痛みも部位を移動するなどの変化があつて然るべきです。これを前提とすれば「治らない愁訴や疾病（固定された愁訴や疾病）」というのは体に正しい変化が起こらない結果であり、その背景には必ず「機能的な滞り」があると考えべきです。これが「凍った体」であり、ある機能の停滞によって愁訴や疾病が定着するのだと考えられます。だとすれば、仮に、未だ経験の浅い施術者が表面の愁訴や疾病を解消しても、またどこかに愁訴や疾病が現れる可能性は高くなるわけです。しかし全身が変化するためのきっかけを与え、体に変化を与え続けることなら不慣れな施術者でも可能ですし、そうした施術は積み重ねることによって次第にその効果も高まっていくものです。愁訴や疾病を「退治すべき悪者」と決めつけるのではなく、体に生じた「停滞」の結果だと置き換えれば、施術の意味も愁訴や疾病への「攻撃」ではなく「協力」へと変わっていくことになります。

また、この章の内容は「体というものの扱いに慣れる（体と仲良くなる）」ための段階でもあります。大和整體では基本的に「愁訴や疾病の治し方」というものが存在しません。ヒトの体（心身）は十人十色であり、そこに「定型的な治し方」を用いるということは、ヒトの体を画一的に扱う、いわばヒトの多様性の理解と逆の方向となってしまう。「体の治し方」を覚えるのではなく、まずヒトそれぞれの体の仕組みを経験的に理解する。その結果として、なぜそういう愁訴や疾病が起こっているのかを、目の前のヒトを通して

理解する。だからこそ、目の前の体に合った施術の方法が見つかるのだと思います。

この章で施術の基本としている「支点の解除」は、現在の「誤った状態で機能している体」を構築している体の機能バランス、その起点を順次消し去っていくという手間のかかる作業です。しかし、だからこそそれを追いつける中で「体というものの仕組み」を体感的に理解しやすくなります。池の水に石を投げればそこに波紋が生じます。支点の解除もこれと同じで、ある支点の解除が全身に及ぼす影響（波紋）というのはヒトそれぞれで、それを追いつけていると、その中に「そのヒト独自の反応」または「誰も共通の反応」の区別が見えてきます。その蓄積が、その施術者が自身の経験によって培った「身体観」となり、その身体観をベースとした「施術観」ができあがるわけです。書籍や他人に教わった身体観・施術観というのは、そこに限界が生じやすいものですが、自分の経験から生み出された身体観や施術観に限界はありません（あるのは経験の不足のみ）。

経験の浅い施術者の多くは、施術に際して「治さなければいけない」といった強迫観念にも似た感覚を持っているものです。しかし誰も、ヒトの相談に乗る時は「答えを出すこと」より先に「話を聞くこと」を優先するように、理解することこそが、結果的によりよい答えに繋がりやすいものです。体は「治そう」とする意識で接してしまえば、施術者自身が先にある結果しか見ないので、多くを語ってはくれません。しかし、「理解しよう」と接するならば、より雄弁に多くのことを語ってくれるものです。個人的にはそうした“過程”を「体と仲良くなるための時間」として、楽しんで貰いたいと思います。